

様式4

令和元年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立大久保中学校 教諭 稲橋 哲朗

1 派遣期日 令和元年10月23日(水)

2 研修先 学校名(会場名): 千葉県八千代市立西高津小学校
所在地: 千葉県八千代市高津832-38
<http://www.yachiyo.ed.jp/enisitaka/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取組

研究のテーマ: とも(友・共)に学ぶ体育授業 ～ 思考・判断・表現力の高まりを求めて ～

八千代市立高津西小学校では昭和55年以来一貫して体育科の学習を通して、児童の健全な心と体を育成しようと考え、体育の取組に力を入れてきた。しかし、児童の取り組む姿勢には二極化が課題となっていた。本来、体を動かす楽しさとは、運動を通じた友達同士の関わりの中で感じることができると捉えている。しかし、小学校段階でその経験が少ないのが現状である。それにより、運動に親しむ資質や能力の育成を阻害するに止まらず、意欲や気力の減退、コミュニケーションをうまく構築できないなど、児童の心の発達にも影響を及ぼすことも考えられる。

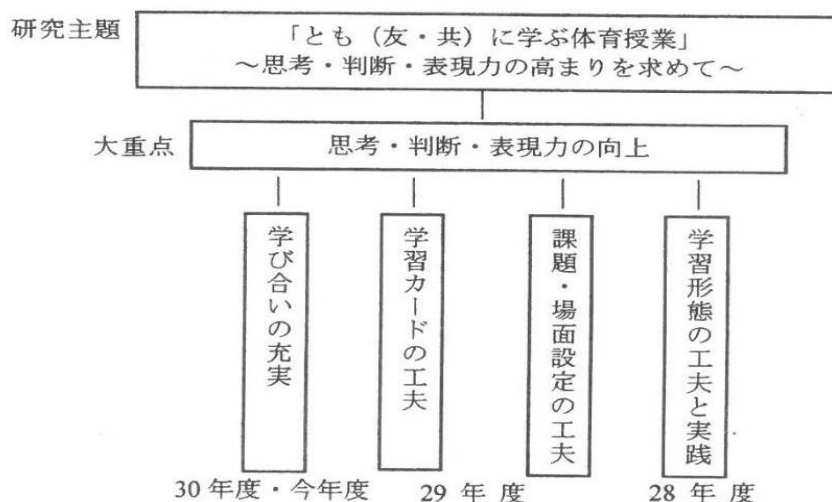
そこで八千代市立高津西小学校では、平成26年度より、体育科学習指導要領の目標を達成するために研究主題を「とも(友・共)に学ぶ体育授業」とした。友達と一緒に体を動かしながら考えたり、思考錯誤したりする学習を通して、「分かった、できた喜びを知る」、そして「運動の楽しさを知る」経験へとつなげていくこととした。また、今年度より副題を「思考・判断・表現の高まり」とした。友達と考えを交流する機会の充実、資質の向上を図ることで、一層それに迫るものと考えた。

研究の柱

生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成

●学級経営の充実 ・安全面に対する配慮 ・男女のかかわり ・学習規律の徹底	●体育科を軸に児童を育てる ・授業スタンダードの活用 ・基礎感覚学習の充実 ・体育の生活化, 日常化	●思考・判断・表現力の育成 ・ICTの活用 ・運動の知識理解 ・言語活動の充実
--	---	--

2 今年度の研究重点



自ら考え、思考・判断し「わかる」、また課題解決のために友達と交流し「かかわる」ことで、成功したい、つまり「できる」ようになりたい意欲も増すだろう。そして、それら全てが相乗的に向上するのではないか。そのような体育授業を日々展開していくことを考えている。

(2) 授業等を参観して

①授業実践の例

・第2学年 「鉄棒を使った運動遊び」

児童の実態として、「怖いから鉄棒運動が一番嫌い」という傾向があったことから、教師が安全面への配慮や、取り組みやすい場や段階的系統的な課題の設定に注力したことがうかがえた実践だった。また、課題の内容も、回転や逆さ感覚など様々な運動神経を伸長する内容、筋力を伸長する内容など、身につけさせたい運動技能や能力なども明確であった。学習形態は、ペアでのローテーションとしたことで、相互のアドバイスや励まし、ハイタッチなど児童同士の関わりにあふれていた。さらには、「てつぼうランド」で活動させたことで教師の指示は少なく、効率よく授業が進んでいた。ゲーム性のある課題や、今までできなかった課題を達成した際は、周囲の友達と歓声をあげる場面が数多くみられ、汗だくになっている児童も少なくなかった。運動技能構造の正確な理解と、それに基づく運動処方や場の設定は、大変参考になった。

・第3学年 「マット運動」

「自己の感覚や他者からの声かけ→自分の技能面での課題の把握→練習方法や場を自分で選択する」という、授業の柱がはっきりとわかる実践であった。その柱を基にした展開で児童たちは、思考、判断、表現力、関わる力、団結力を高めていったようである。適切な情報量でかつポイントをおさえた掲示物を参考に、児童たちは自身で場を選択、設定する児童の表情は真剣でやる気にあふれていた。練習する場を選ぶ際や、助言する姿から「この練習の場では、どんなことを伸ばし、どこに気をつければよいのか」を、練習する側も協力する側もよく理解していると思われ、驚いた。

・第5学年 「跳び箱運動」

「グループみんなでがんばろう」という雰囲気がとても強く感じられた授業であった。グループごとに結束力があり、とても活気があった。それを支える担任の学級経営や児童をやる気にさせる体育指導は想像に容易い。グループは、異なる習熟度の児童で構成されていた。それもあり、リーダーのような児童が自然と生まれていたのだと考えられる。技能に関わる助言も児童がよく行っていたが、掲示物や学習資料、今まで教師が行ってきた技能に関わる指導があつてこそだと感じた。教師は、児童一人一人の技能実態やがんばりをとてもよく見取っていて、一人をほめては息つく暇なく次の児童をほめるといった様子であった。

②業間体育

縦割り班での自由遊びを参観した。縦割り遊びは週に1回のペースで行っているそうである。その様子を間近で参観することができた。6年生を中心に、集まってすぐに話し合いがまとまり、簡単にルールを確認しそれぞれ運動を始める。上級生は、安全面や、他のグループへの配慮をしながら活動場所を定めていく。転んだ下級生への接し方も手慣れた様子であった。遊びに関しての、何らかのアドバイスをする姿も少なくなかった。鬼ごっこによく見られるもめ事も見られず、下級生もルールをしっかりと遵守していた。校舎から出てくる際もそうであったが、終わりのあいさつを各グループで終わると、どの児童も走って校舎に戻る様子は、驚きであった。

4 感想

研修で時間を共にしたある学校の教師から、「千葉県内で、最も運動ができる学校は有名であるが、その学校の児童の自己肯定感や自己有能感は平均よりも低い。西高津小の子たちは、運動能力はそこまで高くはないが自己肯定感や自己有能感は高そうですね。」という話を聞いた。考えさせられる一言であった。教育活動は、子どもたちが将来幸せになれるよう展開するという大前提を大切にしたいと思った。西高津小の実践は運動の能力を伸ばすことが目的ではなく、運動を通して、思考・判断・表現力・関わる力を伸ばそうというのが目的であることが伝わってきた。その目的の達成のために、教師が行った研究や苦労など学ぶべきことが多くあった今回の研修であった。今回学んだことや感じたことを、今後忘れずに実践の中で生かしていきたい。